

生命の實相

第3卷

光明篇・生命篇「上」

(128)

吾が臨^{きた}れるは物のためではない、生命のためである。肉のためではない、靈のためである。これを覺るものは少ない。物の生滅に心を捉えられ、物が殖えたときに信仰を高め、物が減ったときに信仰を失い、身体が健康になったときに神を讃え、家族の誰かに病氣が起こつたと云つては信仰を失うが如きは、神を信じているのではなく物を信じているのである。物は結局移り変わるものであるから、物の御利益の上に建てられた信仰は、物の移り変りによつて壞れるのである。神が病氣を治して見せるのは、肉体は心でどうにでも移

り変らせることが出来ると云う事實を見せて、「体」は念の影だと云う真理をさとらせるためである。念の影だと云う「体」とは肉体ばかりのことではない。幽体も靈体もすべて念の影である。「死は無い」と云うのは肉体のことではない。現に肉体細胞は刻々死滅し流転している。生き通しであるのは、かくならしめていゝ「生命」のみである。「生命」のみが吾れであり汝であり、そのほかに吾れも汝もないのである。此の「生命」をみたまと云う。みたまの形は珠のように真^{まん}ん円^{まる}いからみたまと云うように解するものもあれども、真ん円いのは形のことではない。神は本来形無く、空のうちに円満具足して自由自在であるから仮に称して円相と云うのである。自由自在なるが故に或る時は竜神の姿を現じ、また或る時は衣冠^{いかん}東帶^{とうたい}の姿を現じ、或る時は天使天童の姿を現

ずる。いずれの姿も権化^{ごんげ}であつて偽^{いつはり}ではない。しかし一つの形に執^{しゅう}して、そのみを吾れであると思ふものは、吾が眞実を知らざるものである。吾が全相を知らざるものである。汝ら心して眞^{まこと}を知れ。汝たちも神の子であるから我れと同じきものである。肉体は汝の一つの現われであつて汝の全相ではないのである。

(昭和七年四月十日神示)

なぜわれわれが「生命の實相」の扉をひらく時、医術などではとうてい及ばない驚くべき自然癒能^{しぜんゆのう}が発揮されるかと申しますと、人間は本来、神の子としてつくられているという真理を見いだすからであります。人間の本質は神であり靈的存在である。「神なる人」こそ人間自身の実相であります。自由自在の靈性こそ人間自身の本来の面目であります。われらの本来の面目は神本来の面目にひとしいのでありますから、われらは自己の全存在のすみずみまでも完全であり、万徳円満であり、自由自在で不悩不苦であるはずであります。この真理を知ることが、人をして、あらゆる束縛から解放せしむることになるのであります。しかもこの真理は、人の生命の實相に穿^{うが}ち入る者には、誰でも知ることができるのであります。人の生命の實相に穿ち入るにはこれを靈的に理會する事が必要であります。頭で真理を理會するということは、真理の周囲をどうどう廻りして真理の外的なすがたを知るにすぎませんが、靈的に真理を理會するということは、「生命」の実相そのものに全身全靈をもって貫き入り力の本源をつかむことになります。全身全靈をもって、生命の實相に貫き入るには、この書を頭で読もうとせず、全身全靈で読む、黙読する、朗読する。目

で読み、声で読み、声のリズムのなかに自分を溶かし込んで読む、そして静かに端坐^{たんざ}して「神想観」を行い、行じ終って動き出すとき神（愛）の生活を生きる、かくする時、知恵と愛とのそろった生活が実現するのであります。

谷口——ただ一回の話で病気が治ったというのではこんな実例もあります。P先生の孫に宮夫さんという幼 稚園へ行っていられるお子さんがある。その方が二カ月前からせきが出てどうしてもそのせきが止まらない。医者に見せると気管支力タルだという、その子供のお父さんは肺結核でなくなれたのだから、こうせきが長びいて、おまけに気管支力タルだという恐ろしい病名を付せられたのだから恐怖心が起こらざるをえない。ある日、そのお子さんのお母さんがわたしの家内に道で会った。その時、その子供の話をして なんとか治らぬものかなあと相談せられた。それでわたしがその晩その子供さんを見舞ってあげたのです。すると子供のお母さんはいろいろな心配していることや、医者が有名な大橋液の注射をしてくれたが、きかないことや、そこから三軒目に、神憑^{かんが}りになる人があって、その人に、その土地の地主の神と称する神が憑^か って、「自分はこの土地の地主の神の竜神だが、自分を祭ってくれたら、この辺一帯をよく守護して、子供に風邪一つひかせないようにする」といったのだそうです。神憑りという、すぐありがたがる人たちに よくあることで、これはぜひ近所で共同でお祭りせねばならぬというので、近所三軒でP先生宅の横手の 小路に半間四方ぐらいのお宮を建ててお祭りすることになったのです。P先生とこでも、近所から神様のお

宮を建てるために寄進をしてくれといわれると、無下に反対するわけにもゆかないので、いくらかの共 同寄進をさせられた上に、一週間交替にそのお宮にお供えの当番をすることになったのだそうです。と ころがP先生は、御承知のとおり霊眼のよくお見えになる方ですから、お祭りしたお宮のなかを霊眼で御覧になると、地主の神という竜神はその宮に納まっていないで、三軒目に神憑りがあるという人の憑^{ひょう}霊^{れい}——神憑りといっても神様がお憑りになるのではなくある動物霊が憑っているのだそうですが、その動物 霊の姿がP先生の霊眼に見えたのだそうであります。神さまかと思ってお祭りして毎日の神饌^{しんせん}などの当番 までしているのに、それが動物の靈魂であるということになると、どうも神饌のお供えなどをする当番の 役目にも誠が出ない——自分に誠が出ないと、誠なしに神さまのお供えなどの当番をしていると神罰が当たりはしないだろうかというような恐怖心が湧いてくる。それで、そのお子さんが病気などになると、いっそうそういうことが気がりになってくる。もっともその神憑りになって、地主の神を祭れといった人 のうちの子供が、妙なことには、かえって第一番に激しい風邪をひいてせきがいつまでも止まらないで弱 っていられるし、なにが御利益だかわからないので、P先生におうかがいすると、「地主^{じぬし}の神」を祭るとい ってその実「地主の神」でもないくだらない低級霊を祭っているものだから、守護の力がないのだといわ れましたがそんなことがあるものでしょうか、というようなお尋ねなのです。そこでわたしは申しました。 本当の神様というものはお祭りやお供え物をていねいにするから守護するが、お祭りやお供え物をていねいにしないか

ら守護しないというような、そんな商売取引のようなものではない、神様というものはお宮をこしらえてもらってそのなかに納って、誰かが給仕をしてくれねばお腹がすいて苦しいというふうな不如意不自由なものではない。お宮の中へ入れて、毎日の給仕をしてくれるからそのお礼に守護するというようなのは、ある種の「靈魂」であって本当の神ではない。「靈魂」を祭るということと、本当の神を祀るということとは異う。ある種の「靈魂」がお宮に祀ってもらい、毎日のお供えをもらうためにその家や家族をある程度まで守護することがあるのは、われわれが犬に棲む所を与えてやり、毎日の食事を与えてやれば、その犬がその家を守護し、家族を守護するのと同じことである。「靈魂」というものは肉眼に見えないけれども、靈眼その他の方法ではわれわれ個人個人と同じように個別的な姿をもって存在しており、おのおの我執をもって存在し、喜ぶ場合もあれば、腹の立つ場合もある。喜ばせれば守護もし、謝恩的にわれわれをも助けてくれるが、腹を立たせたり、怨みに思わせれば逆に復讐的にわれわれに害を与えることもありうる。だといって、その害を恐ろしいといって、万物の靈長たる人間がその他の靈魂に媚びる必要もない。といつてもまたせっかく祀つてある靈魂を輕蔑する必要もない。それは隣りの家で犬を飼っているからといって、その犬を輕蔑して足で蹴とばす必要がないのと同じことである。祀られている靈魂は祀られている靈魂としてそれが動物靈であろうが、そのまま尊敬していいに取り扱ってあげるのがよい。それは祀られている靈を生かし、同時に隣りの人の氣持を生かすことであつて、そこにわれわれの心の中に愛が生きて

くる。この「愛」が神であつて、そこに本当の神が自分の心のなかに祀られたことになる。神というものは、此處に見よ、彼處に見よというように肉眼でも靈眼でも見えるものではない。見えるのは一個の差別的存在であるが、差別と差別とが一緒に溶け込む愛という連結のなかに神はいますのである。本当の神というものは差別を絶した全体であるから、われわれの行ないや心持ちが差別的な境涯を脱したら、その程度に従つて神がハッキリとあらわれられるのである。そこに本当の神が生きてくれば、もうわれわれは恐れる必要はない。どんな惡靈が崇つてやろうと思つても、自分自身がその崇りの怨念の波長を受けるラジオの受信機にならないからもう恐れる必要がない。何かを恐れるとその何かを受信しやすい精神波動を自分自身のなかに作るようになるから恐れないがよろしい。

いろいろの靈魂を祀つてもあながち悪いことはない、ただそれは本当の信仰の対象とすべきものではない。こちらのやり方によつて、怒つたり、罰をあてたり、復讐したりするようなものを信仰の対象としていると、相手は肉眼で見えない「靈魂」のことであり、こちらからこうして祀っているのが氣に入っているのか氣に入つておらぬのかわからぬから、常に神罰を受けるかと思つて戦々競々としていなければならぬ。それでは信仰というものが心の平和の礎とはならないで、心の不安の原因になってしまう。わたしも以前には大本教を信じて常に神のみに逆いはしなかつたと思つて、戦々競々としていた時代があつた。一本の繩の帶、一枚の着物のほかに、ほとんど何一つ持たないほど物質を捨てて、みずから称して大本教のフランススだと言つてい

たが、それでも神が自分を赦してくれたという確信がもてなくて、戦々競々として 神の怒りの前にふるえていました。その頃わたしは、身体は不健康、顔色常に蒼白で、第二期結核にでも かかっているような調子で、家内もしじゅう病氣であった。それは今から考えてみると、自分の恐怖心が 自分および家族の肉体にあらわれていたのです。ところが、神というものはそんなに自分の外にあるの ではない、そんなに移り気で怒ったり愛したりしているものではない、自分というものが神の子である、 神の子であるから自分そのものがまた神である。他に神を求めるにおよばない、自分の内の神様を生かす ようにすればよいものだという真理を悟るようになってからというものは、頼りにならぬ外の神様を頼り にしてその機嫌の善し悪しに従って、自分の運命がフラフラ変化するというようなものでないということ が解ったから、ソトの神さまを恐れる必要がなくなった。自分の内の神様を生かすようにするだけでよい、 この自分のうちの神様というものはお供えのしようが悪いとか、お経や宣詞（のりこと）のあげようが悪いとかで腹を 立てたり復習をしたりする我執をもった神ではない、どこまでも真ん円い円満完全な朗らかな神性であつ て、それはその神性をみとめさえすれば、その認めることによって、どれだけでも円満完全に顕われ出る ものであることが確實であつて、時々の御機嫌によつて御利益を与えたり神罰を与えたり、いろいろ変る ような不確かなものでないということが明瞭になつてきた。この不確かなものを信じていると心が動揺し 恐怖するから、わたしでも恐怖心で病氣になつていたが、確實な不動な正しいものを信じるようになると 病氣が自然になくなった。だか

らあなたでも近所のお堂に祭つてあると。いうような不確かな何靈かわか らぬような、頼りないものから御利益が来るとか来ぬとか信ぜずに、自分のうちに宿っている本当の神様 を信じてそれをのびのび顕すようにする、つまり自分のうちに宿っている神性を信じてそれを出すように すれば病氣は治る。子供の病氣でも同じことである。子供に病氣が出るのは親の念の波動を子供が感受し ているからである。親の神性を顕すようにすれば子供の病氣は治る、神というものは調和であり愛である から、家のなかに不調和な精神的争いがあつては神というものは顕われぬ。

「もしもわれわれが自己の周囲に目観（もくく）するすべての物象を、無限無窮のこの世界を、自分が眺めたとおりのものと思うなら、われわれは大いに誤っているのである。われわれが、形体を有するすべての物象を知っているのは、そういう認識に到達させる視覚、聴覚、触覚を持つている結果にほかならない。もしもそれらの感覚が異つたものであつたら、この世界全体が別個のものになつたであろう。したがつてわれわれは、われわれの望んでいるこの外的世界がいかなるものかを、ほんとには知っていないのだ。知りえないのだ。われわれの正確に完全に知っているのは、ひとりわれらの霊のみである。」

これによつてみましても、教会宗教に反対して『キリスト教学批判』を書き教会から破門されながらも、「原始キリスト教に帰れ」と絶叫したトルストイの宇宙観がいかに「生長の家」の所説と一致しているかということがわかるのであります。つまり教会

キリスト教(すなわち後世、人間が理知ででっちあげたキリスト教)でなしに、原始キリスト教——本當のキリスト教は、五官に見える世界は存在しないということを説いていたということになります。なんの教えでも眞實の教え、深い教えは同じ眞理に到達するのであります。トルストイはまた別のところでこんなことをいっています。

「鉄は石より固い。石は木より、木は水より、而して水は空氣より固い。しかしながら触れることのできないもの、見たり聞いたりすることのできないものが、なによりも一番固いのである。これのみが過去、現在、未來を通じて厳存し、永遠に滅することが無いのである。ではそれは一体なんであるか？ すなわち人間の内なる靈である。」(同書 四十九ページ)

この「人間の内なる靈」という一句の「内」^{うち}という言葉にわれわれは捉われてはならないのであります。「内」といっても、肉体は実在しないという前提がありますので、「肉体の内」という意味ではむろんないのであります。言いあらわしようがないので「内」といっていますが、「外」^{そと}に対する「内」^{うち}ではない、むしろ「虚」^{きょ}に対する「実」^{じつ}、「仮」^{かり}に対する「眞」^{しん}、「現」^{あらわれ}に対する「実」^{ほんもの}というような意味の「内」^{うち}であります。この「内なる靈」すなわち「眞物の自分」こそ一等固いものであるというのがトルストイの思想であって、「生長の家」の説くところに一致しているのであります。「生長の家」では常に「眞物の自分」というものは、金剛不壊^{こんごうふえ}の実相身^{しん}であって、刀杖^{とうじょう}もなおこれを傷つけることができない、全世界の重荷もなおこの金剛不壊の実相身

を庄^{あつじゅう}重^{じゅう}することができないというふうに説かれているのであります。この「本當の自分」の金剛不壊の実相が解ってきたら、人間は本當の自由を得るのであります。

全世界のいかなる者にも自分が害しよう、傷つけよう、と思つても害することも傷つけることもできない、鎖で縛つて自由を奪つてやろうと思つても、縛りきれない自由自在なものが「本當の自分」であるということがわかつてくると、もうなにも恐れるところがなくなるのであります。トルストイはこの遺稿に次のように書いています。

「吾人^{ごじん}は肉体によつて生くるに非^{あら}ず、靈によつて生くるのである。もしも吾人がこの事實を知つて、自己の生命を肉体でなく靈に托するならば、吾人は鎖に縛られても、鉄の扉の中にいましめられても、なおかつ厳として自由である。」(同書六十七ページ)

このようにわれわれは自分自身というものを物質であると思わず、「本當の自分」というものを「金剛不壊」の靈的実体であるということを見解することになると、形の上では縛られていても、實際において縛られていない自由自在な状態が實現するのであります。すべての悲しみとか怒りとかいうものは、自分自身をなにか形のあるものであつて、ほかから縛り得るものだと思つてゐる妄想誤想から出て来るのであります。だからこの妄想誤想を断ち切ればわれわれは悲しみや怒りやその他あらゆる心の不自由から脱することができるのであります。

心靈研究家などや巫女などのかたのうちには、靈眼で靈の姿を

見て、あの人に憑いている霊はこういう形をしているとか、なかには狸の形をしているとか、狐の形をしているとかいう人がありますが、それは、ラジオの波動やテレビジョンの波動を感受して、それを声に顕わしたり姿にあらわしたりする受信機がその人にできているということにすぎないのであります。ラジオの受信機がここにあつて東京にいる放送者の声をここで出したからといって、東京にいる放送者が、現実に関ここに来ていたといえ、それは真理を知らないものであります。狸の霊姿が霊的受信機に（すなわち霊視能力者や霊媒）に顕われたからとて狸の霊そのものがそこに来ているというふうなものではない。この世界は波動の世界であるから、その波動をある形に再現する装置をつくれればその種類にしたがつて、いろいろの姿が顕われ、いろいろの声が発せられるけれども、その姿、その声が本来そこにあるのだと考えるとまちがいのであります。この点で、肉眼に見える世界はむしろのこと、霊眼に見える世界でも、それがそのままそこに存在すると考えるものは迷いに捉われているといわねばなりません。よく人は、見えるから存在するという、しかし、肉眼にせよ、霊眼にせよ、見えるということはなんら存在するという証拠にはならないのであります。トルストイもいつているように見えないものだけが本当の存在であります。この谷口自身にしましても、この肉体は眼に見えていかにも一見確固とした存在であるかのように見える。しかしこの肉体はけっして確固不壊の存在ではないのでありまして、なんびともこの肉体の生活を終らねばならない、言い換えると結局肉体は死滅してしまわねばならない同情を求むる心——不幸を招く心「生長の家」に「ひとから同情せられようと

思うな。実際同情せられねばならぬような状態になる」という「智慧の言葉」があります。これは病気の治療にも当てはまるのでありまして、病気の原因にもいろいろありますが、「どうもあの人は気の毒な人だ、姑さんから苦しめられて、あんな病気にかったのだ」とひとから同情してもらいたかったり、または自己同情したかったりする気分が、潜在意識の底に潜んでいるために、病気をわれとわが心で起こしている人もずいぶんこの世のなかにはたくさんあるのであります。この同情されたかったり、自己同情したりする心は、どこから起こるかといいますと、人間の真相は神の子であつて、本来無形のものである。無形であるから、何物にも縛られない自由自在なものである、金剛不壊の霊的実在であるということをおぼえなければなりません。このいかにしても害しやうのない、金剛不壊の自分自身でありながら、その「本当の真相」というものを悟らず、他とか物とか事件とかが自分を害したと思う、害したと思うと腹が立つ、腹が立つとそこによくない精神波動を起こす、類は類を招び、自分のよくない精神波動は、宇宙に漂っているよくない精神波動を招び寄せて、ついにその精神波動が形に化して病気を具体的に起こすことになるのであります。

無限無尽の生命につながるわれら

この目に見えない無限無尽の生命の地下水——すべての地上の水が、地下水において一つに連なっているように、すべての生命は、目に見えない世界において一つにつながっているということとはなんというすばらしい壮麗なことではありませんか。このすば

らしい莊嚴な偉大な生命の流れが、あらゆる目に見える事物の背後にあって、心の法則——すなわち「念のフィルムを通して、一切は形に化して顕うつつわれるという法則」にしたがって、いっさいの顕うつつ世の事物をこの世界に顕現けんげんしつつあるのであります。光をさえぎる念のフィルムをかけたものには陰多き世界が現われる、いっそう透明なフィルムをかけたものにはいっそう光明多き世界があらわれる。この世にはかくのごとくして光明と暗黒とがあらわれ、健けん不健ふけんがあらわれ、幸不幸があらわれる。しかしあらわれたもののうち、光明と、健康と、幸福とのみが実在であって、暗黒と、病氣と、不幸とが実在でないのは、後者は、ただ陰多き念のフィルムにさえぎられて、光がそこに無い、実在がそこに無い、生命がそこに無いという消極的状态にすぎないのであります。だから無いものは無いというほかはない、暗黒はこの世に無い、病氣はこの世に無い、不幸はこの世に無い。この世に生命の水がないといつてつぶやいているのは、みんな本当に生命の水がないのではなく、生命の井戸を掘らないからであります。生命の井戸の水を深く掘れば掘るほど水は無限に湧いてくる。だから、生命が涸渴しているという状態——病氣という状態、不幸という状態は本来無い、そこには実在が流れ込んで来ていないということ、すなわち実在がない——非実在だという消極的状态にすぎないのであります。